

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Computers and Anthropology : Anthropology and Information : Computers in Maningrida

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00003606 |

コンピュータとアボリジニ

——情報民族学の試み——

久保 正 敏*

| | |
|------------------------------|----------------------|
| I. はじめに | 1. 開発経過 |
| II. マニングリダの組織と機能 | 2. データの内容分析 |
| III. アボリジナル・データベース・プロジェクトの意義 | V. アボリジニの情報観 |
| 1. コンピュータ民族学的視点 | 1. 人の情報処理モデル |
| 2. 応用人類学的視点 | 2. マニングリダにおけるメディア略史 |
| 3. 民族学情報収集方法論 | 3. アボリジニの学習態度 |
| 4. 文化変容の分析 | 4. アボリジニの言語コミュニケーション |
| 5. 情報民族学的視点 | 5. パーソナリティの規範 |
| IV. アボリジナル・データベース・システムの概要 | 6. 狩猟採集社会の情報観 |
| | 7. 近代化との相克 |
| | VI. おわりに |

I. はじめに

1988年7月から、筆者はオーストラリア共同研究会に参加し、アボリジナル・データベースを作成するというプロジェクトを進める事になり、現在までに、1988年7月～8月、1989年1月～2月、7月～8月、1990年8月、の計4回、アーネムランドのマニングリダにおいて、コンピュータ・プログラムの作成と、現地での操作指導を行ってきた。その契機は次のような事情による。

アボリジニ領内では、過去の植民地政策への反省から、アボリジニの生活全般を支援する様々な機構や組織がオーストラリア連邦政府の援助のもとに設置されてきた。マニングリダは、連邦政府直轄の生活支援拠点として1958年にいち早く設置されたコミュニティのひとつである。

マニングリダには、政府の出先機関、飛行場、警察、病院、学校、マーケットなどの様々な施設が置かれ、生活支援活動が進められている。アボリジニの人たちは、現

* 京都大学 大型計算機センター

在でも野外キャンプ地にでかけ、狩猟採集をしばしば行いが、そのスタイルは随分と近代化されたものである。かつての槍に代えて手には銃を持ち、ブッシュの中を四輪駆動車で疾走し、無線電話でグループ間の連絡をとりながら、狩りを行う。銃、四輪駆動車、無線電話は、いわば現代狩猟採集民の三種の神器であるが、ブッシュでの酷使に耐えかねてしばしば故障する。マニングリダには、これらの修理工場が設置されており、彼等の伝統的狩猟採集文化を支援する意味で非常に重要な役割を果たしていると言えよう。

この修理工場は、**Bawinanga Aboriginal Corporation**(略称 **BAC**) という法人組織であるが、その白人責任者 **B** 氏と民博のオーストラリア・グループは10年来の深い関係があり、フィールド・ワークを進めるうえで彼に大変世話になってきた。**BAC** では、修理依頼の受付け、修理明細の帳簿付け、それに基づく請求書発行、入金受付け、などの業務の正確・迅速な処理をねらって、これらを電算化することを計画し、民博グループに相談を持ちかけた。1987年夏、別件で民博を訪れた **B** 氏がグループ・リーダーの小山修三氏と打合せを行い、その結果、翌1988年から筆者が研究グループに加わりフィールド・ワークを行うことになったのである。

これらの業務を処理するソフトウェア・システムは、現地での修理業務を支援すると同時に、アボリジニの人たちの狩猟採集活動の記録を間接的にデータベース化する機能も合わせ持つことになる。そのデータは、我々民博グループにとって、アボリジニの狩猟活動を解析するのに貴重な資料となる。

BAC は、修理業務だけではなく、社会保障費の給付、アボリジニの芸術作品の買上げ、販売も行っている。これらのうち、社会保障費の給付事務を電算化すれば、アボリジニの複雑な親族組織を解明するのに役立つデータが集まるであろう。ただし、個人のプライバシーに十分な注意を払わねばならないのは当然であるが、さらに、芸術作品の買上げ、販売業務を電算化し、作品のテーマ、素材などをデータベース化できれば、アボリジニ芸術の変容を追跡することも可能となろう。このようにして構築された「アボリジナル・データベース」は、アボリジニ文化の研究素材となるとともに、現地コミュニティ自身の意志決定に役立つ。

このように、アボリジナル・データベース・プロジェクトの直接的な目的は、アボリジニ文化に関するデータ収集であったが、その他に、筆者が期待していたのは、アボリジニの人たちへのコンピュータ操作指導を通じて、彼らの教育・学習システムの特徴をつかみ、そこから、アボリジニ文化における情報伝達や知識体系の形成方法などを明らかにすることであった。すなわち、アボリジニ文化における情報の体系の特

徴を明らかにすることであり、「情報」という切り口から、アボリジニ文化を理解する手がかりを得ることである。こうした手法による民族学研究は、「情報民族学」と呼ぶことができるであろう。

さいわい、これまで4回のフィールド・ワークの結果、アボリジニ文化における学習や情報伝達手法の特徴をいくつか見いだすことができた。本稿では、データベースとして蓄積されたデータの分析とともに、アボリジニの情報観の特徴についても議論を行いたい。

II. マニングリダの組織と機能

図1に示すように、マニングリダは、ノーザン・テリトリ（北部特別州）の州都ダーウィンの東方、約300km、東経134度14分、南緯12度03分に位置する。熱帯性気候に属し、11月から4月までの雨季、5月から10月までの乾季に分かれる。年間降雨量の平均値は1641mmで、降雨は1月から3月に集中し、この間は日最高気温は32°C前後、日最低気温は25°C前後、日中湿度は70~82%に達し、非常に過ごしにくい。乾季は日最高気温が30°C前後、日最低気温が17~18°Cで、6月~9月はまったく雨を見ず、快適な季節である。

1930年代以降、アーネムランドの海岸にはいくつかの小セトルメントやミッションが作られ、その中で最も大きな町に発展したマニングリダは、1958年に政府セトルメントとして確立した。現在マニングリダが支援しているアウトステーションは、図2に示すように35カ所にのぼる。1985年現在、マニングリダの人口は、アボリジニ約660名、白人も含むアボリジニ以外の人たちが約50名、アウトステーション人口は約630名である。

マニングリダの地図を図3に示す。ここに置かれている公的な組織は、町議会

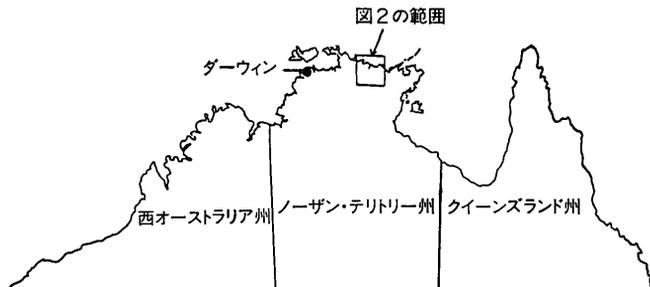
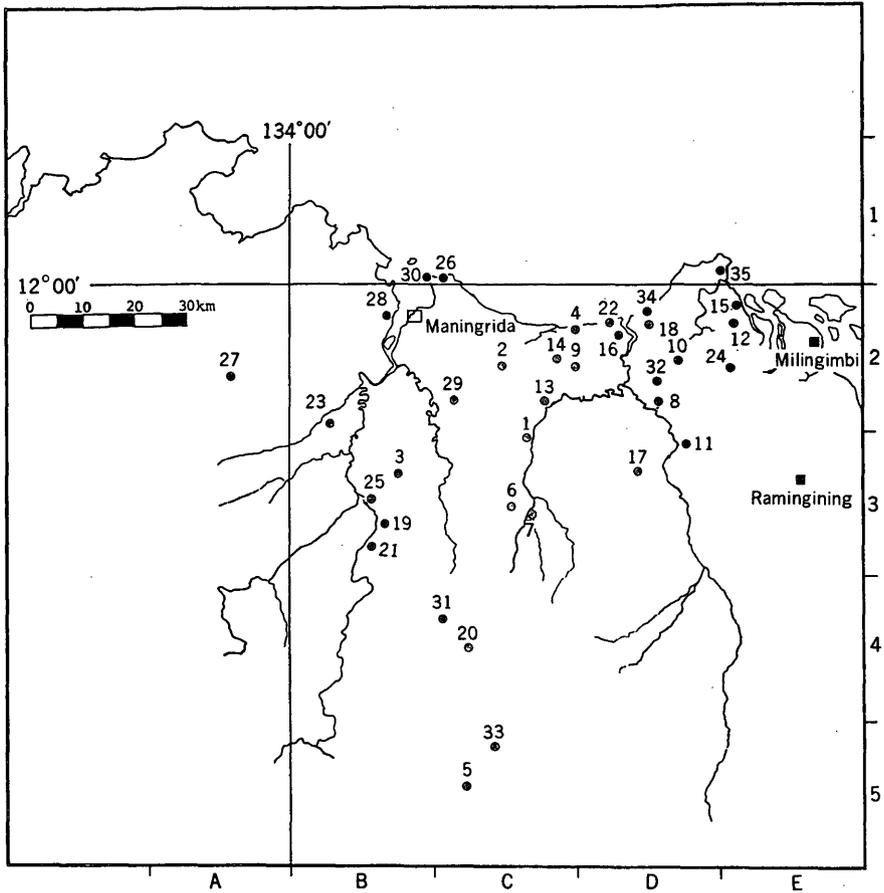


図1 オーストラリア北半



- | | | | |
|-----------------------|----|------------------------|----|
| 1 Angababirriyi | C3 | 19 Kabababuldi | B3 |
| 2 Barnamarrakkakanora | C2 | 20 Korlobirrahda | C4 |
| 3 Barrihdjowkeng | B3 | 21 Kubumi (Yikarrakal) | B3 |
| 4 Berraja | C2 | 22 Malamayjarra | D2 |
| 5 Birriba | C5 | 23 Marrkolidban | B2 |
| 6 Borlkdam | C3 | 24 Mewirubi | E2 |
| 7 Buluhkaduru | C3 | 25 Mumeka | B3 |
| 8 Dam Dam | D2 | 26 Nadjilmuk | C1 |
| 9 Djebbenna | C2 | 27 Nakalaberrberr | A2 |
| 10 Djimalawa | D2 | 28 Nakalarramba | B2 |
| 11 Gamardi | D3 | 29 Nanark | C2 |
| 12 Gamarrguyrra | E2 | 30 Ndjudda | B1 |
| 13 Gochan Jiny-jirra | C2 | 31 Ngankorlord | C4 |
| 14 Gorong Gorrong | C2 | 32 Wurdeje | D2 |
| 15 Gu-mugumuk | E2 | 33 Yayminyiyi | C5 |
| 16 Gupanga | D2 | 34 Yilan | D2 |
| 17 Ji-balbal | D3 | 35 Yinangarduwa | E1 |
| 18 Ji-marda | D2 | | |

図2 マニングリダ周辺

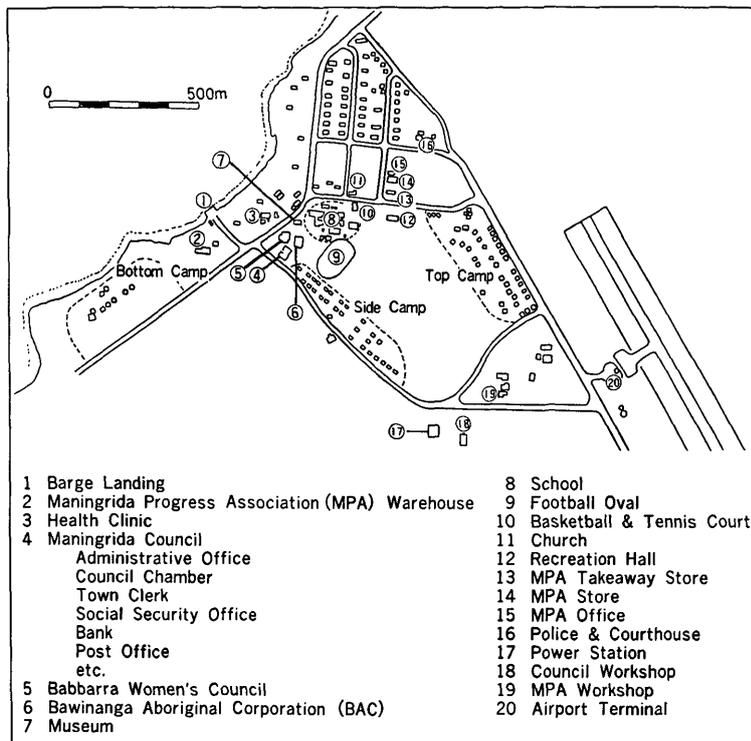


図3 マニングリダ

(Town Council), 学校, MPA (Maningrida Progress Association), BAC (Bawinanga Aboriginal Corporation), 診療所, 警察などである。表1に、それぞれの機能をまとめて示す。

町議会はマニングリダ定住者の生活支援にかかわる様々な意志決定を行い、それを実行する機関であって、上下水道、道路、住宅の建設・管理、発電所の管理など、おもにマニングリダのインフラストラクチャに責任を持つ。町議会事務所には銀行、郵便局、簡易テレビ局が併設されている。これに対し、BACはアウトステーション住民の生活支援を目的とする組織である。

MPAは、町民やアウトステーション住民の消費財の販売を担当する。マニングリダのマーケットの経営、タッカー (Tucker: 食物を意味するオーストラリア英語)・ランと呼ばれる四輪駆動車による食料品移動販売 (2週間を1サイクルとする)、レンタル・ビデオ・ショップやガソリン・スタンドの経営を行っている。消費財は2週間に一度、ダーウィンから貨物船 (Barge) で届けられる。

表1 マニングリダの組織と機能

| | |
|---|-----------------------------------|
| Town Council | |
| 町民の生活支援 | |
| | 上下水道・住宅・道路の建設・管理, 発電所, 社会保障費給付 |
| MPA (Maningrida Progress Association) | |
| 町民・アウトステーション住民の生活物資 | |
| | マーケット経営 |
| | 移動食料販売 |
| BAC (Bawinanga Aboriginal Corporation) | |
| アウトステーション住民の生活支援 | |
| Mechanical Workshop | 三種の神器 (4WD-Car, 銃, 無線ラジオ) やボートの修理 |
| Social Security | 社会保障費給付 |
| Resource Centre | 諸設備 (井戸, 住宅, 道路, 太陽電池) の設置・修復 |
| Art and Craft Centre | 美術工芸品の買上げ, 制作指導, 販売 |
| Health Clinic | |
| 町民・アウトステーション住民の健康管理 | |
| School | |
| | 3歳児~12歳生徒の教育 |
| | それ以上のための成人教育 |

診療所に医師はいないが、看護婦（白人3名、アボリジニ3名）が町民とアウトステーション住民の健康管理を行い、必要に応じてダーウィンの総合病院と連絡をとりながら治療を行う。また、2週間を1サイクルとして、ホスピタル・ランと呼ばれる移動診療も行っている。白人、アボリジニの出生・死亡はすべて診療所で把握されるため、町民、アウトステーション住民のかなりの部分の健康記録がここに保存されていると聞く。

マニングリダの学校は、3、4歳の子供のための pre-school, 5~12歳児のための primary-school, それより年長者のための post primary-school の3つから成り、それぞれの専任教師をあわせると、白人約15名、アボリジニのアシスタント教師約10名になるが、その他にアウトステーション専任の白人教師が数人いる。スタッフの数から見ても、学校がマニングリダにおける最大組織である。

筆者はこれまでのフィールド・ワークの過程でまず BAC, 次いで学校と接触を持つ事ができたが、町議会, MPA, 診療所とは接触を持つには至っていない。

BAC は、アウトステーション住民の生活支援を目的として1978年に設立された ORA (Outstation Resource Association) を1979年に法人化し改名したものである。BAC は、機械工場 (Mechanical Workshop), 大型設備センター (Resource Centre), 社会保障費給付部門 (Social Security), 美術工芸センター (Art and Craft Centre)

の4部門に大きく分けられる。

機械工場では、アボリジニの人たちの狩猟採集に必須の移動手段である四輪駆動車やボート、銃、それに、アウトステーション同士の連絡に必須な無線電話など、耐久消費財の修理を行う。大型設備センターは大型トラックやトラクター、クレーン車などを保有し、各アウトステーションに、風車を動力とする井戸、学校や住宅、太陽電池発電装置といった大型設備を設置・修復する業務を行っている。機械工場と大型設備センターは一体となって業務を行っているが、前者が個人向けサービスであるのに対し、後者は公的資金に基づく業務であるから、両者は別会計で運用されている。

アボリジニの人たちの現金収入の大きな部分を占めるのが社会保障費であるが、町に定住するアボリジニの人たちに対する給付業務は町議会事務所が行うのに対し、アウトステーションに籍を持つ約630名の住民に対する給付を行うのがBACの社会保障費給付部門である。ここでは、週に一度BACあてに送られてきた小切手の配布を行う。町議会事務所に同居している銀行で小切手が現金化されるが、銀行の営業時間が短いこともあって、住民はBACを訪れて現金化を依頼したり現金を借りたりすることが多く、その会計は機械工場部門の会計に組み入れられている。BACが手近な銀行かわりに利用されているわけである。ここには、アウトステーション住民ほぼ全員についての、氏名、家族、本拠アウトステーション名、出身語族などの、いわば戸籍簿が、小型カードの形態で保存されている。しかし、その更新は充分には行われていない様子である。

美術工芸センターは、木皮画、木の内皮の繊維で編んだ袋、パンダナスで編んだ籠、木彫、槍、貝殻を糸で連ねた腕飾りや首飾りなど、アボリジニの伝統的工芸品を制作者から買い上げ、それらの展示即売を行うとともに、制作指導や各地で行われる展示会・展示即売会への出展も行っていて、オーストラリア各地の美術館や博物館とも深い関係を持っている。ここには、作品の制作者、作品のテーマ、買い上げ価格などの記録が保存されている。給与所得を得ていないアボリジニの人たちにとっては、社会保障費とともに美術工芸品の売り上げも、現金収入の大きなルートである。

Ⅲ. アボリジナル・データベース・プロジェクトの意義

筆者たちが進めているアボリジナル・データベース・プロジェクトは、開始してから2年余しか経過しておらず、まだその途上にあるが、その意義は、1) コンピュータ民族学的視点、2) 応用人類学的視点、3) 民族学情報収集方法論、4) 文化変容の

分析, 5) 情報民族学的視点, の5点から考えることができよう。

1. コンピュータ民族学的視点

民博の創設時に、従来の民族学にはなかった新しい研究部門として、「コンピュータ民族学」部門が設置された。この部門が果たすべき課題は、杉田繁治教授によって、次の3点にまとめられている [SUGITA 1987]。すなわち、コンピュータと民族学との関係を、1) 民族学の道具としてのコンピュータ、2) 民族学の方法論としてのコンピュータ、3) 民族学の対象としてのコンピュータ、という3点でとらえ、それに対応する研究課題を設定するものである。

第1の課題は、情報処理の分野で従来から開発されてきた様々な技術、すなわち、統計処理、言語・文字処理、画像・音声処理、データベースと情報検索技術などを、研究の「道具」として民族学に適用するものである。第2の課題は、情報処理における数量化やモデリングの手法を民族学研究に導入しようとするものである。民族学研究には、生の情報から仮説や理論を組み立てるボトム・アップ的な過程と、その理論を再び生の情報に当てはめて検証するトップ・ダウン的の過程とが必要であるが [久保1986]、従来ともすれば軽視されがちであった後者の過程を、コンピュータ可読なモデル形成とそのシミュレーションという方法によって支援しようとするものである。第3の課題は、コンピュータを代表とする機械文明装置を切り口として、文化比較を行おうとするものである。ある文明装置が導入されようとする時、その文化がそれをそのまま受け入れるか、あるいは、従来文化と融合させるか、あるいは、全く拒絶するか、といった対応の違いによって、その文化の特質を明らかにする手がかりを得ようとするものである。

これらの観点から見ると、筆者たちのアボリジナル・データベース・プロジェクトは、データ収集とそのコンピュータによる解析をねらう点で、第1の課題に沿った意義を持つ。しかし、こうしたコンピュータとの関わりという観点だけではなく、このプロジェクトは、アボリジニ文化を対象とすることによって、以下に述べるような4点の意義も合わせ持つと考える。

2. 応用人類学的視点

民族学研究によって得られた知見を、植民地支配とキリスト教の布教活動に「応用」してきた事實は、民族学がその学問の発展当初から実用の側面を伴ってきたことを物語っている。植民地政策が転換された第2次大戦後も、経済的戦略に応用されること

が少なくなかった。こうした支配する側の民族学は、しばしば、現地の伝統的な文化や社会構造を破壊してきたと言われている。

これに代わる新たな「応用人類学」は、現地の人たちの立場にできるだけ近づいて、その利益になるものを指向しなければならない。すなわち、民族学情報の収集という民族学者にとっての利益が現地にとっての利益として還元されるという「互恵性」が得られるような研究プロジェクトが望ましい。

筆者たちのアボリジナル・データベース・プロジェクトは、現地での日常業務支援用のソフトウェア・システムをまず開発するところから出発するから、間接的ではあるが、アボリジニ生活支援という側面を持つ。さらに、集積されたデータは、筆者たち研究者にとって研究材料であると同時に、コンピュータ・システム自体が現地に置かれたものであるから、必要に応じてデータを加工・出力できるようにソフトウェアを組めば、それは現地における様々な意志決定にも容易に利用され得るのである。このように、優れて互恵性を持った研究プロジェクトであり、新しい形態の応用人類学プロジェクトとすることができよう。

3. 民族学情報収集方法論

さきに述べたように、マニングリダの公的組織は、アボリジニの人たちに関するいくつかのデータをそれぞれに保持している。町議会は、町民に対する社会保障費給付業務の必要上、戸籍簿に相当する記録を保持しているはずであるが、BAC が保持しているアウトステーション住民に関する同様の記録、さらに、診療所の保持する出生・死亡記録とを合体すれば、マニングリダ周辺の1300名近くの親族組織や人口動態を解明するのに役立つものとなるであろう。

社会保障費給付記録はまた、給与所得以外の現金収入を示すものである。MPA、町議会、BAC それぞれに、従業員に対して給与を支給しているが、これらのデータと社会保障費、さらに BAC の美術工芸センターにおける買い取り記録を合わせれば、マニングリダ周辺のアボリジニ全員の現金収入ルートと額が明らかになる可能性がある。一方、MPA での消費財売り上げ記録、BAC での耐久消費財売り上げ、修理記録は、主たる現金支出を示すものである。これらの現金収入と支出の記録を突き合わせれば、伝統的な狩猟採集社会に持ち込まれた貨幣経済の実態を把握する手がかりが得られるであろう。

また、BAC の機械工場が修理する耐久消費財は主に狩猟採集活動に利用されるものであるから、その記録を通して、間接的にはあるがその活動を把握することがで

きよう。

こうした記録類はこれまですべてカードなどの形でそれぞれの組織・担当者が保持しており、それらの横断的利用が試みられたことはない。各部門でこれらの業務を支援するシステムを開発すれば、これらのデータが電子化でき、組織的な収集と解析が容易になるであろう。この方法によるデータ収集は、ことあらためて記録を収集するのではなく、日常業務の過程でデータが自動的に蓄積されるものである。その意味では、民族学研究における新しい情報収集方法であると言える。

しかしながら、この方法論には2つの大きな問題点がある。まず、収集されたデータは、アボリジニ個々の具体的活動を抽象化した、いうならば二次情報であるから、個々の活動や事象を平均化し、特異点や特徴を隠してしまう恐れがある。個々の生活現場からデータを収集する、従来の民族学方法論をボトム・アップ的な情報収集とすれば、データベースによるこの方法はトップ・ダウン的な方法と言えるが、マクロ・レベルでの情報化である後者の方法は、組織的であるという利点の一方で、前者の方法によれば見いだされる発見を見逃してしまう欠点がある。従って、両者の方法論をうまく組み合わせることが必要となる。第二の問題点は、極めて個人のプライバシーに関わるデータを、組織的・大規模に収集してしまう危険性である。プライバシー保護と情報公開という、「情報化社会」と同じ問題が関わってくるので、人権に対する十分な配慮がない限り、安易にとるべき方法論ではない。当事者との合意が得られ、かつ、こうした方法論による研究成果が現地にとって利益となるような還元の方法を明らかにして行うべきであろう。

4. 文化変容の分析

もしこうした配慮のもとで、組織的なデータ収集が可能であれば、そのデータは、現代狩猟採集文化がどのような変容を示しつつあるかを解明する大きな手がかりとなる。西欧流の貨幣経済は、アボリジニ文化の変容に影響を与える大きな要素の一つであることは言うまでもない。それは、経済的側面だけではなく、数量化という点から見ればアボリジニ文化の知識体系・情報観にも影響を及ぼしていることが予想される。従って、先述した現金収入・支出に関するデータを長期間集積し、通時的に分析すれば、文化変容の研究に役立つであろう。また、美術工芸センターにおいて、作品のテーマや素材、制作技法などをデータ化し、その時間的変化を追跡してゆけば、アボリジニ文化における芸術活動が、経済的要因や西欧技術、西欧流芸術との関わりでどのように変容しているかを解明する手がかりが得られるであろう。これはまた、民

族芸術学，あるいは民族技術学的研究にとっても興味ある材料を提供するのではなからうか。

さらに，こうしたコンピュータ・システムをアポリジニの人たちが業務として操作することが日常的になれば，タイプライタにさえあまり馴染みのなかった彼らがそれをどのように受け入れるか，例えば，ソフトウェアの操作における分析的・階層的問題解決やあいまいさを排除した計算の正確さなどの，彼らの伝統的思考とは異質であると考えられる観念がどのように受け入れられるか，といった，コンピュータ民族学の第3の課題に近い問題とともに，その受容による彼らの文化が変容するかどうか，という新たな興味ある問題も生まれてくる。

5. 情報民族学的視点

ある個人の持っている空間認識，時間観念，計数観念，経済観念，さらにシステムをどう認識するかというシステム観，などは，彼が属する文化や社会構造，経済構造に大きく規定される。これらの観念は，外界から与えられた情報を個人の頭脳がどう処理し，その結果どのような意志決定や行動選択を行うかを規定するから，彼の行動が文化の文脈から逸脱しないものになるのである。このようにして規定された意志や行動は，同じ文化の他の成員に対する情報となって伝達され，コミュニケーションが成立するのであるから，情報伝達の方法・様態もやはり文化に規定されたものとなる。従って，情報伝達メディアの利用にも，その文化の特徴が現れてくるであろう。

世界観，計数観念などを扱う従来の認識人類学的視点，教育や学習を扱う教育人類学的視点，コミュニケーション論的視点は，ともに人間の情報処理の体系，すなわち，情報の伝達・咀嚼・蓄積の問題として統合的に捉えうる。であるならば，上述したように，ある人間の情報の体系は文化に規定されるから，文化における情報の体系を論じることによって，逆にその文化の特質を明らかにするという民族学方法論が成り立ち得るであろう。こうした方法論を「情報民族学」と呼ぶことは，十分に妥当性があると筆者は考えている。

こうした視点が生まれてきたのは，筆者が開発しているソフトウェア・システムの操作法をBACのアポリジニ・スタッフたちに講習し，彼らがそれを学習するのを観察する過程で，その学習方法がアポリジニ文化に規定された特徴を示すことを見出したからである。また，筆者が伝統的な学習方法や質問・応答の方法を知ることによって，それらを勘案した操作性がソフトウェア・システムの側に必要であることも明らかになってきた。すなわち，アポリジニ向きのコンピュータ・システムを作成するために

も、彼らの情報の体系を知る必要を感じるようになったのである。

このような契機から、情報民族学を構想するに至ったのであるが、もとより、乏しいフィールドワークの経験から情報の体系全体を論じることの危険性を認識しつつ、知己を得た学校の白人教師たちから得た知見も合わせて、第V章で情報民族学的議論を行いたい。

Ⅳ. アボリジナル・データベース・システムの概要

1. 開発経過

前述したとおり、BACの業務は機械工場、大型設備センター、社会保障費給付部門、美術工芸センターの4部門に分かれているが、筆者は、まず機械工場の修理業務支援ソフトウェア・システムの開発を1988年8月から始め、次いで1989年8月から社会保障費給付業務用のシステム開発を始めた。

1) 機械工場修理業務支援ソフトウェア・システム

この業務の流れは、顧客からの修理依頼がジョブカードと呼ばれるカードに記述され、それが機械工に手渡され、修理明細（必要とした部品、単価、個数の他に、部品をダーウィンから取り寄せた場合はその運送費、労働時間も含む）が書き込まれ、その合計金額をもとに各顧客への請求書が作られると同時に各顧客毎の貸借簿に記録され、顧客からの支払があれば貸借簿が更新される、という、一般的なものである。

筆者は、1988年8月の最初のフィールドワークにおいて、筆者の訪問直前にBACが購入したIBM-PC/XT互換の韓国製パソコン（MS-DOS）の上に、市販のデータベース・ソフトウェアdBASE IIIをインストールし、そのプログラミング言語を用いて、上記の業務全体を支援するソフトウェア・システムを開発した。これは、顧客管理、ジョブカードを作成するジョブ管理、課金・入金を記録する金銭管理、貸借簿から顧客毎・期間毎の貸借レポートを出力する貸借管理、の4つのサブ・システムに分かれ、それぞれがさらにサブ・システムに分かれた、階層構造で実現されている。この構造自体は、一般的なトランザクション処理と同じであるが、金銭管理のサブ・システムには、BACを銀行代わりに利用する者への金銭貸与、同一親族内の顧客間での勘定の移動、など、現地の事情を勘案したルーチンも組み込んである。

四輪駆動車、ボート、無線電話、銃など、アボリジニの各顧客が持っている耐久消

費財が受けた修理内容からそれらの使用状況を把握することが筆者たちの関心事であるから、ジョブ管理部分に修理明細を詳しく記述できるようにプログラムを組んだ。特に、四輪駆動車の修理については、修理部分を、ボディ、シャーシ、ブレーキ、エンジン、電気系統、その他、に分類し、メニューによってそれを選択するように仕組んである。しかし、BACが電算化を必要とした主な理由は、筆算による計算間違いのために顧客毎の金銭貸借関係がずさんであった点を改善することであったから、その後蓄積されたデータ内容を見ると、操作者が面倒がって修理部分をすべて「その他」に分類してあるなど、修理状況は筆者たちが期待する程には詳しく記述されていない。

2) 社会保障費給付業務支援ソフトウェア・システム

この業務は、週に一度郵便で届けられる小切手の費目と受給者名を記録し、それらを受給者に手渡したことを記録して、手渡しの誤り・漏れがないかを確認するものである。小切手が届く都度ノートに受給者リストを書き、手渡した受給者のサインをもらうという、従来の煩雑な方法を電算化によって改善することが、BAC側のねらいである。

開発したソフトウェア・システムは、受給者登録、受給者毎の費目登録、小切手の受け取り、手渡し、それぞれの業務用サブ・システムから成っている。受給者は、各人の種々の属性データも合わせて登録される。ここで属性として取り上げたのは、本人の氏名、生年月日、所属する言語グループ名、出身のアウトステーション名、そして、その人の配偶者、両親、子供それぞれについての同様の属性である。言語グループは、B氏の示唆によって、表2に示したもののうち、大分類11項目の中から選択することにした。受給者の社会保障費目は、表3に示したうちから選択して登録される。

このソフトウェアによって蓄積されるであろうデータは、民族学研究にとって次の意義を持つ。登録された個人属性によって、少なくともBACが関係しているアポリジニの人たちほぼ全員の親族関係が把握できる。表3の内容を見ればわかるように、ある人が受給できる費目は変化するから、受給費目の履歴によって、その人の家族史が推測できる。さらに、小切手の手渡し記録から、各受給者の現金収入を把握できることになる。しかし、繰り返し述べるように、こうしたデータは、個人のプライバシーに直接触れるものであるから、取扱いには細心の注意が求められる。

機械工場の修理に関するデータの蓄積は、1988年9月から一応始められたが、残念ながら次に列挙するようなトラブルによって、現在までの継続的なデータは得られていない。

表2 マニングリダ周辺の言語グループ

| |
|---|
| Alawa |
| Burarra |
| Burada, Burarra Anbara, Burarra Gunard, Burarra Madai, Burarra Maringa, |
| (≧) Gulula Burarra, Burarra Mukali (≡ Gungorogone), Gunardba |
| Gunavidji |
| Ngalia, Walang |
| Gungorogone |
| Gunwinggu |
| Jinang |
| Ganalbwingu, Gupabwingu, Jambarbwingu, Ritarrnga, Wubulgapa, Wulaki |
| Rembaranga |
| Dangbon, Maiali |
| Ngalkbun |
| Nakara |
| Wagaman |
| Yanangu |
| Maringa |

表3 社会 保 障 費 目

| |
|---|
| Pension, Age-Pension, Widow-Pension, Widower-Pension, Invalid-Pension, Family-Allowance-Supplement, Child-Endowment, Child-Disability-Allowance, Supporting-Mother, Sickness-Benefit, Unemployment-Benefit, Special-Benefit |
|---|

- a) 1988年11月, データ入力中に停電し, データファイルとその検索のための索引ファイルとの整合が狂い, システムが動作不能となった。ソフトウェア・システムのベースとなっている dBASE III を知っていなければ修復できない事態である。マニングリダの電力を供給している重油発電所は, その管理責任者の怠慢から, 10日に一度は予告なしに運転を停止する。停電対策として, 停電後数分間は内蔵したバッテリーから電力を供給できる「無停電電源装置」の購入を B 氏に依頼し, その導入まで, コンピュータ作業を中断した。環境条件と保守体制がともに不十分であるマニングリダなればこそそのトラブルである。
- b) 1989年1月, 筆者が現地を訪問し, 無停電電源装置を接続して, ソフトウェア・システムを復旧するとともに, システムの使い勝手を左右する人間との対話処理部(マン・マシン・インタフェース)の改善を, B 氏の示唆により行った。改善の内容はアポリジニの伝統的な教育・学習態度に関わるもので, 第V章で詳しく述べる。コンピュータによる業務を2月から再開した。
- c) 1989年5月, 主にシステムを操作していた白人スタッフA氏が, 市販ソフトウェ

Aの海賊版を新たにインストールした際に誤って DOS システムを改変し、その影響で機械工場修理支援ソフトウェアが誤動作し始めた。専用機械ではなく誰でもアクセスできるパソコンにとっては、不十分な知識を持つユーザの存在が危険となる事例である。

- d) 1989年8月、筆者が現地を訪れて、DOS システムを復旧し、あわせて、社会保障費給付業務用ソフトウェアを開発した。コンピュータによる業務を9月から再開。
- e) 1990年1月、ある BAC スタッフの不注意によって電源コードが抜かれ、a) と同様にデータの不整合が生じた。これを復旧しようとした A 氏の勘違いによって、ハードディスク上のプログラム、データがともに消去され、動作不能となった。
- f) 1990年8月、4たび訪問した筆者は、ベースとなるシステムを電源断に強い dBASE IV に置き換えた。この処置によって、以後はデータ蓄積が順調に行われるものと思われる。

2. データの内容分析

上述の事情により、継続的なデータとして得られたのは、1988年7月から1989年10月までの期間の機械工場のものだけであり、その内容も筆者の期待したレベルを維持していない。そのため、現段階で行えるデータ解析は、以下に述べるような簡単なものにとどまる。

図4に、1989年2月から10月までの月毎の修理金額を修理部分別に集計したグラフを示す。1989年3月に、ボディとシャーン関係の金額が多いのは、美術工芸センターの四輪駆動車に大きな修理が発生したためであるが、これを除けば、アウトステーション活動が盛んになる乾季（5月～10月）の中間である8月に修理が集中することが示されている。

図5は、1988年7月から1989年10月までの期間における、個人向けの修理金額と、BAC、学校、診療所、MPA などの公的機関向けの修理金額を月毎に集計したものである。個人用四輪駆動車の修理は、明らかに活動の盛んな乾季に集中するが、公的機関のそれはどちらかと言えば雨季に片寄る傾向が見える。このことは、雨季の期間においてこそ、公的機関の支援活動が盛んになることを示しているのかも知れない。しかし、これらのデータは短期間の集計であり、しかも、偶発的に発生した修理事象が統計全体に影響を与えるような、規模の小さな母集団についてのものであるから、ここではこれ以上の解釈は避け、長期間の継続的データが蓄積された時点で、再度分析を試みたい。

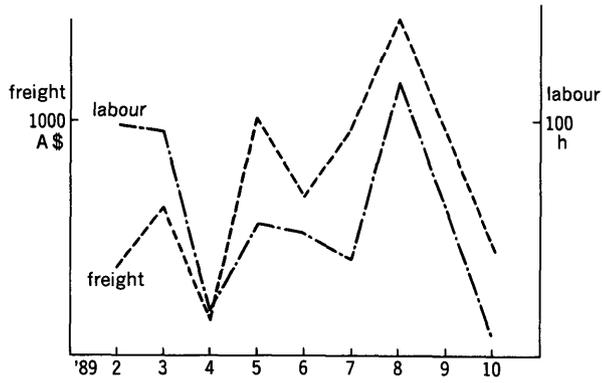
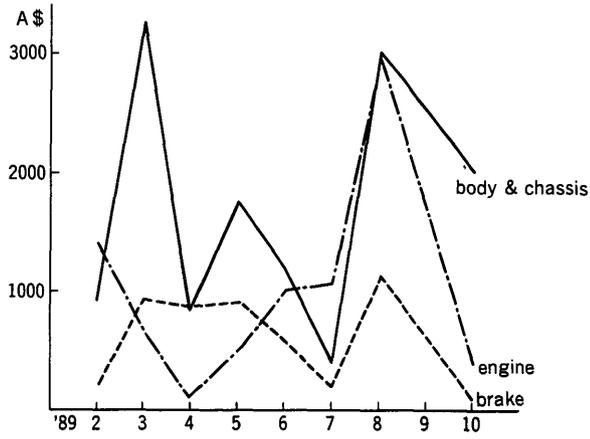


図4 部分別修理料金 (a) と航空便料金, 労働時間 (b)

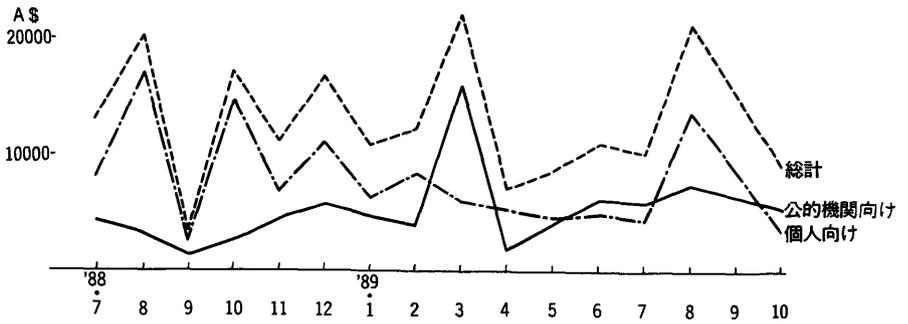


図5 個人向け修理金額と公的機関向け修理金額

V. アボリジニの情報観

1. 人の情報処理モデル

ここでは、アボリジニを対象として、先に述べたような情報民族学的考察を行う。情報の問題を議論する際には、情報、信号、データ、知識、通信、などの用語が必ず登場するが、これらの用語は、様々な文脈で様々な意味あいが使われ、しばしば、議論に混乱と誤解を招く。そこで、アボリジニの情報処理に関する議論を始めるにあたり、まず用語の整理を行いたい。

情報とは「物質・エネルギーのパターン」や「意味のある記号集合」であるとする、非常に幅広く定義する説もあるが、情報とはそれを受け取った頭脳が評価して初めて価値が決まると考える筆者は、Adrian M. McDonough の示した説、すなわち、「データとは未だ評価されていないメッセージ、情報とは特定の状況において価値評価されたデータ、知識とは将来の一般的な使用において評価されるデータである」[McDONOUGH 1963] を採用したい。この説は、Bertram C. Brooks の示した情報と知識との関係を表現する式 [Brooks 1980]

$$K(S) + \Delta I = K(S + \Delta S)$$

にも整合する。これは、知識構造 $K(S)$ は情報 ΔI によって新しい構造 $K(S + \Delta S)$ に変化することを表している。 ΔS は修正の効果を表す。

この説を考慮すれば、人の頭脳における情報処理過程は、図6に示すようなモデルで考えることができるであろう。これは、外界から与えられるどのような信号も、感覚器官を経て頭脳で処理されない限り、情報とはみなさない立場である。また、認知心理学分野で主流である、記憶を短期、長期に分ける二階層説を採用すれば、知識とは長期記憶のレベルまで到達した情報であると言える。図で、情報として評価された部分以下が主観的世界であり、その部分を規定する文化の特質を理解しようとするのが、情報民族学の課題であろう。

一方、Claud E. Shannon の与えた「情報とは不確実性を減らす働きをするもの」という定義は、図7に示す通信モデルにおいて、メッセージの発信者から受信者へ送られる符号が持つ情報量を定量化することから導出されたものである。この図で発信者 (S) と受信者 (R) の間の通信路 (C) は、通信工学や情報工学の文脈においては郵便・電話・放送などの「通信メディア」、あるいは、本やレコードなどの「蓄積

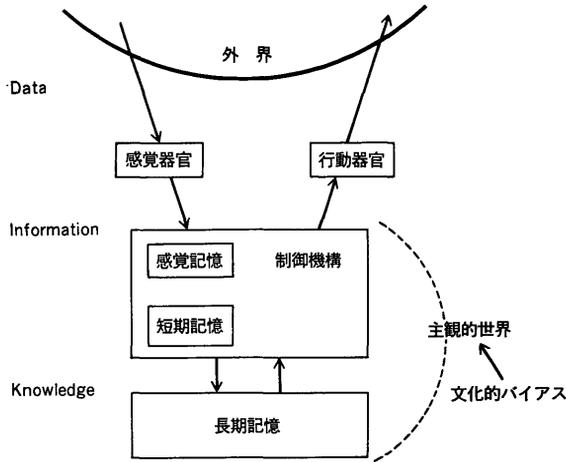


図6 人の情報処理モデル

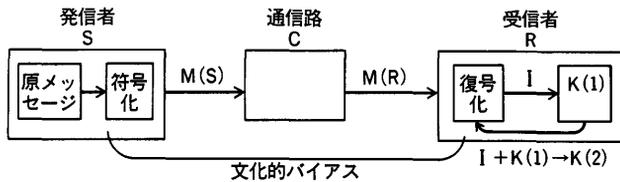


図7 通信モデル

メディア」と考えられるものである。また、「交通メディア」もメッセージを伝達する通信路と考える事ができる。コミュニケーション論は、この通信路に人間自身をも含め、これを經由して噂話や教育・伝承が行われる際の、通信路の容量、漏れ、変形作用などを問題にするものであると行うことができよう。その場合、通信路も文化に規定されていると考えられるから、その特徴をつかむこともまた情報民族学の課題となる。

そこで、以下では、図6、図7のモデルでカバーされる事象を素材として、アボリジニ社会の特徴を考えてみたい。

2. マニングリダにおけるメディア略史

BACのB氏の話や1968年当時の民族誌 [HAMILTON 1981] を参考にしてまとめたマニングリダの交通メディアに関する略史を表4に示す。ダーウィンからの陸上交通手段が現在でも不便であることが、マニングリダ地域の伝統文化保存の一端を担っている。

表5には、電気通信メディアの略史を示す。1970年のバッテリー式無線電話の導入、1975年の太陽発電装置の導入が、ちょうどその前後に起こったアウトステーション運動を促進するのに大きな役割を果たしたことは間違いない。また、1985年の衛星放送開始によるテレビ視聴、およびほぼ同時に導入されたビデオのレンタルシステムは、アボリジニの娯楽を変化させると同時に、映像を通して白人文化を知る機会を格段に増加させたであろう。1968年当時の民族誌によれば、マニングリダの学校で週末に野外映画会が開かれていたから、映像による異文化接触は既にあったが、日常的なテレビやビデオの視聴がマニングリダの町でのみならずアウトステーションでも可能となったことは、アボリジニ文化の変容に大きな影響を与えるのではないだろうか。

無線電話は、一対一の秘話通話がほぼ不可能であるうえに、使用する周波数が既知であるから、アウトステーション間の通話は他のアウトステーションでも傍受可能であり、極めて漏れの大きい通信路であると言える。これに対し、1987年に導入されたマイクロウェーブ電話は、一対一の秘話通話を前提とするメディアである。この普及によって、アボリジニ文化におけるプライバシー観念が変容するのか、また、後述す

表4 マニングリダ交通メディア略史

| | |
|----------|--|
| 1920年代 | ダーウィン=オーエンベリ間 道路開通 ダーウィン=マニングリダ間 帆船 |
| 1945年 | ダーウィン=マニングリダ間 Bush Road 開通 |
| 1956年 | 航空便開始 DC-3 週3便 |
| 1958年 | マニングリダに Government Settlement |
| 1960年 | オーエンベリ=マニングリダ間 道路開通 |
| 1965~66年 | Barge System 開始 2カ月に1度 |
| 1968年当時 | 航空便 週4便 |
| 1975年当時 | 航空便 週6便 Barge 1カ月に1度 |
| 1990年現在 | 航空便 週10便 Barge 2週間に1度 |

表5 マニングリダ電気通信メディア略史

| | |
|-------|---------------------------|
| 1954年 | ミッションが、ペダル発電式無線電話導入 |
| 1960年 | 電信用無線導入、専門オペレータが必要 |
| 1970年 | バッテリー式無線電話導入 |
| 1975年 | 太陽発電システム導入 |
| 1985年 | 通信衛星 AUSSAT 打上げ、衛星 TV 開始 |
| 1987年 | マイクロウェーブ電話線設置 |
| 1990年 | アウトステーションにもマイクロウェーブ電話設置予定 |

るように、伝統的なアボリジニの会話場面においてはメッセージ伝達機能があまり大きくないように見えるが、これが変化するのかどうか、などは、今後の興味あるテーマである。

3. アボリジニの学習態度

マニングリダの東方75kmにあるミリンギンビにおいて、primary-schoolの教師をしながら調査を行った Stephen Harris や Michael Christie によれば、アーネムランドのアボリジニの伝統的な学習方法の特徴は、次の5点にまとめられると言う [HARRIS 1984; HARRIS & HARRIS 1988]。

- 1) 言語による教育ではなく観察と模倣による学習
- 2) 個人の試行錯誤による学習
- 3) 仮想的場面での練習ではなく実際の場面における学習
- 4) 部分分解・総合の方法をとらず、全体を通して実行する
- 5) ねばり強い反復による問題解決

1) は、音声言語による質問・応答や文字によるテキストなどの言語的手段は重要ではなく、もっぱら、学習者が観察とその模倣によって自立的に学習する態度を指す。これは、狩猟技術や儀礼における舞踊など伝統的技術の習得場面で特によく見られると言う。伝統的に言語的な質問・応答という方法は用いられないから、明確に yes, no を求める西欧流の質問に、学校の子供たちは慣れにくいとされる。

2) と合わせて考えると、学習は極めて個人的に行われ、集団学習の形をとることは少ない。筆者は、1) と 2) の態度の背景には、他人の面前での失敗を恐れること、すなわち、体面を極めて重視するアボリジニ文化のパーソナリティが存在すると思うが、この点については後述する。

3) について、Harris たちは、儀礼の舞踊練習がそのまま本番に移行したり、フットボールの練習に見えるものがいつのまにか実際の試合に移行してしまう例を挙げている。この点は、Harris が指摘するような、アボリジニの人たちは仮想的な質問に弱い、という特徴と関連している。すなわち、親族関係などあらかじめ全ての場合が決定されている状況についての仮説的質問、例えば、A と B は結婚できるか、といった質問には適切な答が返ってくるが、生活の文脈に密着した場面での仮想的質問、例えば、ブッシュの中でダンパを作る場面において、台代わりに使っているその葉がもし手近に見あたらない場合はどうするか、という質問に対し、“いや、この葉を使う”という答しか返ってこない、Harris は述べている。アボリジニの思考パター

ンは、生活という文脈に非常に依存しており、仮想化、一般化の機会が少なく、こうした思考法に慣れ親しんでいないためであると考えられる。

4) に関して Harris たちは、儀礼における舞踊や歌の習得場面の例を挙げている。こうした場合、習う側の子供たちは、部分毎に習熟してゆくのではなく、全体を観察してそれを自分なりに模倣し、徐々に完成に近づけてゆくらしい。部分分解、それぞれの分析、最後に統合・総合するという、階層的なアプローチ方法は、アボリジニ文化にとって親しみが少ないのであろうか。

5) については、次のような例が挙げられている。ポート用の2サイクル・エンジンには、燃料に潤滑油も混ぜなければならない。ある時、潤滑油が殆どなくなって、起動に苦勞しているアボリジニの男 A に対し、白人の男 B が潤滑油の不足を指摘して、そのままでは起動できないしエンジンが損傷すると忠告した。しかし、A は聞き入れず、頑固に同じ動作を繰り返し、1時間後にはずみで起動したのを B に得意気に報告したらしい。しかし、案の定、日を経ずしてそのエンジンは壊れてしまったと言う。

マニングリダの学校教師や B 氏たちの証言から、これらの特徴は、マニングリダでもまったく同様である。例えば 1) と 2) に関して BAC で B 氏が経験したところによれば、自動車の運転技術は、A 地点から B 地点まで助手席に何度も同乗してじっと観察し、どの地点でハンドルを切り、どの地点でソフト・ダウンするかを、頭にたたき込むことによって、習得するらしい。また、自動車の修理という場面においても、アボリジニのスタッフは、先輩の修理をじっと観察して習得した修理方法を全く同じように適用すると言う。これは、3) と 4) の特徴をも示したものであるが、B 氏は、また 3) と 4) に関連して、

6) 機械的（丸覚え的）学習

の特徴をさらにつけ加えることができると指摘している。丸覚えによって習得された修理技術は、全く同じ故障に対しては有効であるが、少しでも状況が異なる故障に対しては応用が効かない。機械工の技術教育でいつも悩む点はそこであると B 氏はこぼしている。B 氏はさらに、1) から 4) を総合すれば、スポーツの世界のイメージ・トレーニングに似た、

7) 言語ではなくイメージによる学習

という特徴を挙げる事ができる、と指摘している。逆に言えば、1) から 4) は、イメージ的学習の特徴を示しているのである。

筆者たちの開発したソフトウェア・システムについても、1) と 2) の特徴を表し

た事例が観察された。最初のフィールドワークにおいて、完成した機械工場修理支援ソフトウェア・システムの使い方を BAC のスタッフに講習した時のことである。

このソフトウェアは、BAC の修理業務を分析して、顧客管理、修理依頼受け付け、機械工への指示書発行、請求書発行、入金受け付け、顧客毎あるいは期間毎の貸借表打ち出し、等のサブ業務に分け、それぞれをさらに分割して階層構造に整理し、それらに対応する階層的なシステムに組み上げてある。特に苦労したのは、ユーザ・インタフェースの部分である。会計業務のためにも、筆者たちにとって貴重なデータベースを作り上げるためにも、正確なデータ入力が必要なのは言うまでもない。しかるに、このシステムのユーザは、キーボード操作に慣れていないし、データベースの意義を理解していないから、キー操作のミスを犯すことは避けられない。従って、データ入力のたびに yes か no かの確認をユーザに求め、No の場合やシステムが予期しないキーが入力された場合には常に御破算にするような、フェイル・セーフを徹底したユーザ・インタフェースが必要となる。

いよいよ講習を始めるので、B 氏をはじめ、白人機械工の A 氏、アボリジニ機械工の G 氏、N 氏に集まってもらい、まず、業務毎に階層化されているシステムの構造と、それぞれのサブ・システム内でのキー操作を順々に説明していく。一通り説明を終えて、誰か実際に触ってごらんと促すと、N 氏が、自分はコンピュータが好きであると、名乗り出た。電源投入から順々に、筆者の指示に従って操作をなぞっていく。筆者が“ここでシステムが Yes か No かを聞いてくるから、Y と入力”と説明すると、彼も唱和しながら操作する。

数日間の試用の結果を見て不具合な点を改良するから、どんどん触ってほしいと皆に告げて、一旦解散する。皆それぞれの持場に戻っていったが、N 氏だけはその場に居残るそぶりなので、彼の様子を脇で観察することにする。筆者が課題を出し、それに応じて操作してもらい、それぞれのサブシステムの起動・終了の方法は画面に表示したメニューで懇切に説明してあるのだが、彼はそれをよく読まずに間違ったキーを叩く。筆者が正しい操作を口で説明すると、彼もおうむ返しにそれを復唱するのだが、次の段ではやはり間違ふ。

この N 氏と対照的な態度を見せたのが、アボリジニ・スタッフの G 氏であった。彼は、講習時には筆者と N 氏のやりとりをじっとを観察するのみで自ら手を出さず、翌日の昼休み、B 氏も含め BAC の全スタッフが昼食をとり帰宅して不在中に、こっそりと練習していたのである。すこし早目に昼食から戻ってきた筆者が、陰から見ていると、結構間違いなく操作を進めていく。いつのまに覚えたのか、筆者にとって

驚きであった。

B氏の説明によれば、N氏は1)の模倣的な学習態度のみが突出したパーソナリティの持ち主で、実際はあまりよく理解していないのに、返事だけは調子のよい「オウム返し」型であり、アボリジニとしてはむしろ例外である。G氏の学習態度が、アボリジニ社会に伝統的な学習態度であると言う。まさに、1)と2)の特徴を示したものであったのである。

B氏はさらに、1)の特徴から導出される、「言語による質問や指示をきらう」という態度を考慮して、ユーザに yes, no の確認を迫るユーザ・インタフェースは、できるだけ避けた方がよいと、筆者に忠告した。

こうした忠告に沿って、筆者はユーザ・インタフェース部分を改良したのではあるが、考えてみれば、階層的なシステム構成、文字のみによる指示、yes, no の答を強要するなど、筆者の開発したソフトウェア・システムに限らず、コンピュータ・システムの多くに見られるユーザ・インタフェース部分は、ことごとくアボリジニの伝統的な学習態度に違反するものと言える。しかし、最近のコンピュータ・システムでは、アイコンと呼ばれる図のメニューや、文章と画像を連携させて画面に表示するハイパー・メディアと呼ばれる機能などが備えられてきており、アボリジニの学習態度によりなじみやすいシステムを作り上げることが期待できる。筆者の知る学校の教師も、マッキントッシュ（パソコン）が備えているハイパー・メディア機能によって、アボリジニの子供たちに対する CAI (Computer Assisted Instruction: コンピュータ支援教育) が可能になるのではないかと、大きな期待を寄せている。

4. アボリジニの言語コミュニケーション

これまでに見てきたように、アボリジニ社会における学習は、言語的手段の役割が低く、イメージ的な手段が主流であるように見える。すなわち、アボリジニ社会においては、言語メディアにはメッセージ伝達機能があまり期待されていない、と結論できそうであるが、いくつかの場面における言語の役割からこの点を考えてみたい。ここでも、Harris や Christie の事例紹介 [HARRIS 1984; CHRISTIE 1987] を適宜参照する。

1) 質問

前述したように、質問・応答という方法は伝統的な教育・学習場面であまり見られない。質問を発した者・受けた者ともに、質問は決して答を必ず必要とするものであるとはみなしていない。質問の受け手は答える義務を感じないし、その質問を無視し

てもよい。学校の白人教師は、アボリジニの子供たちに3、4度も同じ質問してようやく答を得ることがしばしばであるらしい。

2) 指示・依頼

これと同じように、言語による依頼・指示は決して強い要請とは受けとめられない。受け手が依頼を拒絶する場合にも、「後で」という婉曲表現を用いる。依頼を発した者もそれを察してあきらめる。このように、yes や no という明確に内容をする指示する言語を用いることは少ない。すなわち、言語に指示機能を求めることが少ないのである。また、これら1)と2)の点も、前に触れたような、体面重視型のパーソナリティとやはり深い関係を持つと考えられる。すなわち、指示や質問の発信者も受信者もともに、互いの体面を尊重して、婉曲表現を採るのである。

3) 討論

Harris によれば、儀礼の開催についての討論などにおいて決定された事項が直ちに実行に移されることは少なく、現実の状況に即した「醸成」期間を経て初めて実行に移される。これは、アボリジニの人たちが極めて現実主義であるとともに、生活・現実の文脈に密着した思考パターンを採ることを示している。

また、討論の場面においてしばしば見られるのは、年長者の権威である。その場での最終決定権を持つのは、儀礼に関する知識を持つ年長者である。これに関連して、Harris たちは、アボリジニ社会では「知識所有権」と「知識表明権」が存在するらしいと述べている。若者は、ある儀礼に関する知識は、それに責任を持つ年長者が知っていればよいと考え、学ぼうとする意欲を見せない。仮にその知識を持っている者であっても、周囲に自分より権威のある年長者が居れば、自ら表明することを避け、知識表明権を年長者に譲る。一方、年長者の方でも、“あの若者は何も知っちゃいない。わたしに聞け。”と自らの知識表明権を主張する。これは、儀礼に関わる知識以外のブッシュ生活に関する知識についても、当てはまると言う。

これらの事実は、アボリジニの知識観を示唆する。言語などの形で文脈から切り取られた普遍的なものとして知識をとらえていないこと、知識の所有・表明と力・権威とが同一視されること、を示している。現在、知的財産権にからめて西欧社会で行われている議論は、知識の共有、公開などを知識モラルと考えているが、アボリジニ社会の知識観はこのモラルと相容れないように見える。であるとすれば、近代化の過程で、アボリジニの知識観と西欧流のそれとの衝突が避けられないであろう。

4) 噂とゴシップ

会話のみならず、無線電話を通して、噂話はすばやくアボリジニ社会に広まって行

く。マニングリダの白人社会でも同様であるが、噂話には常に誇張が伴う。それは、ある事実を伝える機能を持つのではなく、娯楽の提供手段なのである。また、しばしば全く同一の噂話が大勢の前で繰り返し語られ、聴衆は既知の内容に興味はなく、話者の話しぶりにチャチャを入れることを楽しむ。そこでは、噂話の内容が持つメッセージ自体には全く価値がない。

しかし、噂話がある事件に関するもので、その事件に対して何らかの対応を迫られる際には、噂から真実を探り出す必要が生じる。このような場合に、真実に到達する努力と冷静さを求められるのが年長の権威者である。彼は、その噂の最も源泉に近づこうと努力する。Harris は、次のような事例を示している。A 地点である男が魔術をかけたとして警察に捕らわれた、という噂を聞いた権威者 B は、皆がてんでにその噂話をするのを止めさせ、A 地点から来たばかりの白人の住居へでかけ、面識がないにもかかわらず、その噂の真偽を確かめようとした。民博の小山氏もこれと同様の例を実見している。年長の権威者は、知識の所有・表明権を持つと同時に、知識のマネージャであることを期待されているのである。

悪い噂、すなわち、ゴシップは、娯楽を提供するとともに、「いじめ」機能を持つことがある。それによって、アボリジニ社会で非とされるパーソナリティが批判される。強圧的な言動、自慢など、出過ぎた態度は良くないパーソナリティであり、それがゴシップによって戒められ、その結果平準化が計られる。「出る杭は打たれる」のである。規範を維持するためのゴシップの機能は、どの文化にも共通のものであろう。

こうして見てくると、アボリジニ社会における言語メディアの持つメッセージ伝達機能が小さいこと、それはアボリジニ文化が規定するパーソナリティに強く規定された結果であること、知識を普遍的なものと考えず所有権・表明権を個人に帰属させること、知識の所有権・表明権は年齢による権威構造と結びついていること、などが結論される。そこで、次にアボリジニ社会で是とされるパーソナリティの特徴を概観してみよう。

5. パーソナリティの規範

Harris たち [HARRIS and HARRIS 1988] によれば、アボリジニ社会で求められるパーソナリティの特徴には、次の諸点がある。

- 1) 自立的であること、相互干渉を避けること
- 2) 競争的でないこと

3) 横柄・でしゃばり・押しつけがましくないこと

こうした規範が子供の時代から教え込まれて行く。これらの背後にあるのは、極端な体面重視である。アボリジニ社会では、大勢の面前で恥をかくことは無知を表明することよりも社会的コストが大きい、と言われている。また、逆に他より優れていることを誇ることも非難される。

すなわち、親族関係における上下関係、年齢による権威構造などの固定的な優劣関係だけを認め、それ以外の優劣関係が明らかになることをできるだけ避けて互いの体面が保たれるようにする仕組みが、1) から3) までのパーソナリティ規定なのである。少しでも優劣関係が持ち込まれると、「いじめ」によってその平準化がはかられる。学校で教師に誉められた子供は、必ずいじめに会う。Harris や Christie も、良くできた子供に賞を与える西欧流の方法をアボリジニの学校に持ち込まないように、白人教師に警告している。

筆者の見聞したコミュニティ対抗運動会においても、これらのパーソナリティを示す事例を見る事ができる。徒競走にせよ、団体競技にせよ、優劣の結果がはっきり出るわけだから、負けた側、特に、徒競走でビリになった子などは、恥かしさのあまりすっかりしょげ返り、ゴールまで完走せず観衆の中に逃げ込んでしまったりして、痛々しい。これは、体面を重視するアボリジニ社会の重圧を示している。また、優劣がはっきりしてしまえば、それ以上競争を続ける必要がないと判断して完走しないのは、「競争のための競争」の意義を認めない極めて実利的なアボリジニ文化の特徴を示しているとも言える。

しかし、ゲームなどで優劣がはっきり現れざるを得ない場面では、別の形で平準化がはかられる。マニングリダではフットボール試合がしばしば行われるが、B 氏の話によると、試合が終わっても、もう一波乱なしには終わらない。負けたチームは、自分たちの力量不足を決して認めず、相手チームがズルをしたとか、審判が悪いのだと、責任を他に転嫁し、時には相手チームと殴りあい演ずる。責任転嫁による平準化は、他の場面でも見られ、しばしば白人を悪者にして、失敗の原因を押しつけるらしい。アボリジニ社会の外部に責任を追いやって、彼等の社会的固定構造が崩れるのを防ぐのであろうが、自分など知らないうちに何度悪者にされたことか、と B 氏は苦笑している。

前節で見た言語コミュニケーションの特徴は、上で概観したパーソナリティの特徴に強く規定されていることが明らかである。

6. 狩猟採集社会の情報観

これまでに見てきたアボリジニの情報観の特徴を、狩猟採集経済構造から説明できるかを試みる。多くの抽象や捨象を伴う議論であるから、ひとつの仮説に過ぎない。

アーネムランドの狩猟採集社会は、まず、

- 1) 自然は制御できないと考える。
- 2) 自然がある程度豊かである。

という2点を前提条件として成立している。また、独特の神話的精神世界も、情報観のベースとなっているであろう。

1) から、

- 1.1) 世界をありのままに捉える寛容な世界観
- 1.2) event-oriented であり、time-oriented でない時間観念
- 1.3) 働きかけるのではなく機会を「待つ」姿勢

などの特徴が説明できる。また2) は

- 2.1) 蓄積が不要
- 2.2) 協同・協力作業が不要
- 2.3) 問題解決の要が少ない

という条件に書き換えられる。一方、神話的世界はすぐれて並立的・並存的であり、

- 3) 精神世界は絶対神をめざす西欧世界のイデアの世界とは異なる。

1.1) と3) から、西欧科学的な原因・結果関係への関心が極めて薄い特徴が説明できる。実際、why や how を用いる質問がほとんど見られないのはこれを物語る。(疑問文における5W1Hの出現頻度は、恐らく、what who where when how whyの順になるであろう) 一方では、西欧科学が「偶然」で説明する事柄に対しても、精霊的な説明を求めることがある。すなわち、西欧流の検証可能な形での原因・結果関係には関心を示さないのである。

1.3), 2.2), 2.3) から、計画的思考や効率・生産性観念の必要が少なくすむから、仮定的思考や抽象化の概念に弱いなどの特徴が説明できる。さらに、3) と組み合わせると考えれば、階層的な抽象化、一般化の概念、部分分解と総合という手法に馴染みのないことも説明できるであろう。すなわち、生活という現実世界からの「脱文脈」化が行われていない情報観であると言える。ただし、ここで言う抽象化は、西欧流の物質観における意味であるから、アボリジニの神話的世界観においては、異なっ

た意味での抽象化が行われているのかも知れない。

7. 近代化との相克

上で述べたのはあくまでも伝統的な枠組みについてのみ、当てはまることからであって、実際には様々な形で、西欧流世界観との接触が進み、その影響を受けている。現に、公的機関で働いているアボリジニ・スタッフには、計算や階層の概念に強い人たちが多く、しかしながら、西欧の情報観が必ずしもうまく伝統的情報観と両立するとは限らず、両者の衝突が顕在化してくることも予想される。ここで、二つの問題を挙げておきたい。

一つは、知識の所有権に関わる問題である。知識の普遍化、共有や公開とは相容れない伝統的な知識観は、本来アボリジニ全体で討議すべき問題に関する政府との交渉場面において、一部のアボリジニに知識や情報の偏在を生み出し、知識特権階級を生み出す恐れがある。その特権は、容易に経済的利益と結びつくのである。

第二の問題は、アボリジニ社会が男性にかかる期待の大きさである。男性には拡大家族における役割が期待されており、その男が給与生活者として西欧経済に組み込まれている場合にも、それがつきまとう。例えば、BACのN氏も、マニングリダに親族が住んでいるため、しばしばBACの公的設備や金銭の私的流用を親族たちから迫られていたと言う。結局、N氏はマニングリダから逃げだし、現在はカデルというアウトステーションで仕事を行っている。西欧社会に踏み込むと、伝統的な社会で生きて行けば感じなくてもすむプレッシャーを受けるのである。いきおい、新技術を学んで、近代化しようという意欲をそぐことになる。

これに対し、女性には拡大家族から比較的自由的な立場にある。さらに、5.で述べたようなパーソナリティの規範は、女性には強く要請されない。従って、女性の方が、新技術の学習において、高い学習意欲を示すことが多いと言われている。これに関して、BACでコンピュータを操作できるアボリジニ・スタッフの変遷が示唆的である。当初は前述のN氏、G氏がコンピュータを操作していたが、N氏は親族からの圧力を避けるためにマニングリダを去り、B氏から最も期待されていたG氏は1989年5月に心臓麻痺で若くして亡くなってしまった。その後、ダーウィンの職業訓練コースを修了した若いR嬢がBACに雇われ、ワープロ事務を一手に任されている。近代化の鍵を握るのは、社会的規範や責任から比較的自由的な女性なのではなかろうか。

Ⅵ. お わ り に

本稿では、アボリジナル・データベース・プロジェクトの概要と、その過程で生まれてきた情報民族学的課題についての考察を述べた。プロジェクト自体は、現在進行中であり、データ解析による文化事象の分析は今後の課題として残されている。

アボリジニの情報観については、それが極めて文脈依存的事であること、言語の持つメッセージ伝達機能が極めて小さいこと、言語よりはイメージ的な思考方法が主であるらしいこと、そして、その原因として、狩猟採集社会であるという特質とともに、文化におけるパーソナリティが関与していること、などを明らかにした。

言語的ではなくイメージ的な思考方法である点は、右脳と左脳との対立を想起させる。図8に示すように、左脳は主に言語的・論理操作的な働きを、右脳は主に視覚的・空間操作的な働きを司るとされているが、この対立関係が正しいとすれば、アボリジニの思考パターンは、右脳的であると言えよう。イメージ心理学の分野で「直感像」と呼ばれる現象【ドゥニ 1989】について調査した報告【SHEEHAN and STEWART 1972】によれば、アボリジニの子供たちには、イメージ的認知形態を示す「直感像」現象が比較的多く見られるという。この事実も、右脳的思考が優勢であることの証拠であるかも知れない。

本稿では、アボリジニの計数観については詳しく触れなかったが、これも考慮に入れた、アボリジニの情報観についてのより深い考察は、筆者の今後の課題としたい。

| | | |
|--------|-----------|----------------------|
| | 左 脳 | 右 脳 |
| | 言語・論理操作 | 視覚・空間的操作 |
| 二重符号化説 | 命題型符号化・記憶 | イメージ型符号化・記憶 深層構造？ |
| | デジタル的 | アナログ的 |
| | 一次元的 | 二・三次元的 |
| | 抽象的 | 具象的 |
| | 図 | 地 |

図8 左脳と右脳の機能分担

文 献

- BROOKS, B. C.
 1980 The Foundations of Information Science: Part 1 Philosophical Aspects, *Journal of Information Science* 2: 125-133.
- CHRISTIE, Michael J.
 1987 *Aboriginal Perspectives on Experience and Learning: the Role of Language in Aboriginal Education*. Victoria: Deakin University Press.
- ドゥニ, M.
 1989 『イメージの心理学』寺内礼監訳 勁草書房。
- HAMILTON, Annette
 1981 *Nature and Nurture: Aboriginal Child-Rearing in North-Central Arnhem Land*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- HARRIS, Pam
 1980 *Measurement in Tribal Aboriginal Communities*. Darwin: Northern Territory Department of Education.
- HARRIS, Stephen
 1984 *Culture and Learning: Tradition and Education in North-East Arnhem Land*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
 1987 Aboriginal Learning Styles and Formal Schooling. In M. Christie, S. Harris and D. McClay (eds.), *Teaching Aboriginal Children: Milingimbi and Beyond*, The Institute of Applied Aboriginal Studies, Western Australian College of Advanced Education, pp.41-57.
- HARRIS, Stephen and John HARRIS
 1988 Aboriginal Communication Styles, Assessment and Social Change. In Graham Davidson (ed.), *Ethnicity and Cognitive Assessment: Australian Perspectives*, Darwin: Darwin Institute of Technology Press, pp.71-80.
- 久保正敏
 1986 「コンピュータの進化と民族学 <コンピュータ民族学のめざすもの>」梅棹忠夫編 『異文化の探求』講談社, pp.302-310。
 1989 「不惑のフィールドワーク」『民博通信』46: 63-68。
 1990 「続・不惑のフィールドワーク」『民博通信』47: 48-69。
- MCDONOUGH, A. M.
 1963 *Information Economic and Management System*. McGraw-Hill.
- SHEEHAN, P. W. and S. J. STEWART
 1972 A Cross-Cultural Study of Eidetic Imagery among Australian Aboriginal Children. *The Journal of Social Psychology* 87: 179-187.
- SUGITA, Shigeharu
 1987 Computers in Ethnological Studies: As a Tool and an Object. In J. Raben, S. Sugita and M. Kubo (eds.), *Toward a Computer Ethnology*, National Museum of Ethnology, pp.9-20.
- 玉置泰明
 1988 「開発人類学と反開発人類学」『社会人類学年報』14: 177-207。
- 吉田民人
 1972 「社会科学における情報論的視座」『講座 情報社会科学 5 情報社会科学への道』学習研究社。